

今年度の校内研究授業 その3 (山西小学校の取り組み)

※今年度もすべての学校で研究授業が行われました。どの学校でも、各校の教育目標そしてにのみや学園の教育目標である「認め合い、高め合う、二宮の子」の実現を目指した授業が展開されていました。今回は山西小学校の実践を紹介いたします。

今年度は、昨年度の研究の反省から、研究テーマを「『見方・考え方』を働かせる『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善～誰一人取り残されない学級集団、学習集団をベースに～」とし、「見方・考え方を働かせること」を通して、深い学びに到達することを目指す授業のあり方を研究しました。

また、今年度は従来の学年・ブロックの研究組織から、国語・算数・道徳の各教科を選んで所属する研究組織へと刷新を図り、教職員の主体性と創意工夫を最大限生かせるようにしました。

<研究授業① 2年生 道徳 星崎教諭>

「わすれられないえがお」(A 善悪の判断)

多面的・多角的に考えたり、自分事として考えたりできるような発問・問い返しを工夫することで、子ども自身の価値観を更新する学びに到達することをねらいました。単に心情を聞く発問ではなく、「すぐに謝るか」「悩んでから謝るか」を子ども自身に選択させたり、子どもの発言に問い返したりすることによって、多面的・多角的な思考を促進することができました。

<研究授業② 1年生 国語 伊藤教諭>

「くじらぐも」

言葉に着目させるための教師の指導の工夫や、単元を通じた言語活動によって、豊かに想像を膨らませる力の育成をねらいました。言語活動「映画作り」は、主体的な子どもの姿を引き出していました。また、子どもが見つけた言葉を教師が焦点化し、その言葉の意味を動作化したり、話し合ったりすることで、言葉に着目する見方を働かせていました。

<研究授業③ 4年生 算数 井戸教諭>

「小数のかけ算とわり算」

子どもたち自身が話し合う対話的な授業により、「数の仕組み」や「数量の関係性」に着目させることをねらいました。教師の指導や支援は必要最小限として、子ども自身が主体的に話し合いを進める過程を重視しました。既習事項を思考の足場としたり、子ども自身が活用できそうな見方・考え方を選択したりすることを通して、教師主導でない学びを実現していました。

研究授業後の協議会では、授業から学んだことを共有し、教職員一人ひとりが、明日からの授業に前向きに挑戦する思いが高まりました。

今年度に得た「見方・考え方」を働かせる視点と手立てを生かし、来年度の研究では、教師の創意工夫を生かし、子どもたちが主体的・対話的で深い学びに到達できる新たな授業の形を模索していきたいと思っております。



感想等はこちらのフォームをお願いします。

にのみや学園通信 HP

<https://www.town.ninomiya.kanagawa.jp/0000000929.html>

